

発掘調査実績報告

庄・蔵本遺跡発掘調査概要
-新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査-

2000年4月
徳島大学施設委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

I 調査の概要

- ① 遺跡の名称 徳島市庄・蔵本遺跡
- ② 遺跡の所在地 徳島市庄町・蔵本町
- ③ 調査の目的 医学部付属病院新中央診療棟建設に先立つ発掘調査
- ④ 調査面積 約 5,000 m²
- ⑤ 調査期間 平成 11 (1999) 年 8 月 1 日～平成 12 (2000) 年 3 月
- ⑥ 調査主体 徳島大学埋蔵文化財調査室
(室長 北條芳隆総合科学部助教授)
- ⑦ 調査担当 北條・中村 豊 (大学開放実践センター助手)
- ⑧ 調査補助 井本尚子・上田淑子・岸本多美子・安山かおり・山本愛子

II 遺跡の概要

徳島市庄・蔵本遺跡は、徳島大学蔵本キャンパスを中心に、眉山の裾から国道 192 号線にかけての東西 1 km、南北 0.5 kmほどの広がりを持っている。今までに、県教育委員会および県埋蔵文化財センター・市教育委員会・本学埋蔵文化財調査室によって、30 数回の調査がおこなわれてきた結果、縄文時代後期末 (約 3,000 年前) から江戸時代にいたるまで断続的に営まれた遺跡であることが明らかとなってきた。

徳島大学蔵本キャンパス内においては、特に弥生時代前期 (前 3 世紀頃) の資料が質・量ともに豊富で、今までの調査において、弥生時代前期前半の環濠跡・集団墓跡・用水路群などが検出され、徳島県下の本格的な農耕社会の起源をさぐる上で、貴重な資料を提供してきた。このほかにも、弥生時代中期の方形周溝墓や弥生時代後期・終末期の溝・竪穴住居群、奈良時代・鎌倉時代・江戸時代の条里制地割にともなうと考えられる溝などが検出されている。

今回の調査は蔵本キャンパス中央東寄りの地点で、新中央診療棟の建設に伴い、約 5,000 m²の調査をおこなった。今回のおもな成果として、以下の 4 点をあげることができる。

- ① 中・近世の条里制地割にともなう溝の発見
- ② 弥生時代後期 (AD1・2 世紀) の溝・弥生時代終末期 (AD3 世紀前半) の集落跡の発見

③破鏡（異体字銘帯鏡）の発見

④弥生時代前期中頃（BC300年頃）県内最古の水田畦畔（あぜ）の発見

Ⅲ 調査の成果

調査区の半分くらいは、既存の建物（調査前に解体）によって破壊されており、遺構の検出、遺跡の実態を把握するには相当の困難がともなった。

1 第1～第2遺構面の調査

①中・近世の条里制地割にともなう溝

近世 調査区の東寄りに南北方向の溝、これと直交する位置の調査区北寄りに東西方向の溝を検出することができた。これらの溝は、今回の調査地点の南に隣接する病棟地区での調査で検出された、条里制地割に沿っていとなまれたものと考えられる。

中世 南北方向の溝は近世の溝と重なって検出され、東西方向の溝は近世の溝から10mほど北方で検出された。それぞれ幅3～4m、深さ15～20cmの規模である。これらの溝からは、瓦器とよばれる鎌倉時代に作られたと考えられる土器が出土した。

以上の中・近世の条里制地割にともなうと考えられる溝は、キャンパス中央西寄り、1983年の体育館建設に伴う調査でも検出されており、今回の調査区と連続することが確認できた。

2 第2遺構面の調査

②弥生時代後期（AD1・2世紀）の溝・弥生時代終末期（AD3世紀前半）の集落跡

溝 調査区南よりの東西方向に、弥生時代後期の溝を検出した。溝の幅4～5m、深さ30～40cmの規模である。今回の南に隣接する地点で、ほぼ同時期の数棟の竪穴住居跡が検出されており、この溝は、それらに伴った可能性が高いといえる。

集落 調査区中央から東寄りにかけて、4棟の竪穴住居跡と、数基の柱列を確認することができた。竪穴住居はいずれも隅の丸まった方形を呈する。柱列は攪乱によって大半が破壊されており、詳細は不明だが、掘っ建て柱の建物跡で

あった可能性が高い。これらの遺構からは、いずれも黒谷川Ⅱ式～Ⅲ式とよばれる（近畿地方の庄内式土器に対応する）弥生時代終末期の土器が出土しており、付近一帯が、当該期の集落跡であったことが明らかとなった。

③破鏡（異体字銘帯鏡）

1999年9月27日、中国前漢王朝の時代の様式である青銅（銅と錫の合金）製の鏡が出土した。1/5ほどの破片で、復元径9.4cm、最大厚0.3cm、重量28.4gをはかる。残存状態は良好で、錆の付着はみられない。紋様や銘文もはっきりと確認できる。銘文は「以而□（□は不明）」の三文字が確認でき、ゴチック体に近い書体である。また、破断面（割れ口）を丁寧に磨いて、径0.4cmの穴をひとつあけている。おそらく穴に紐をとおしてペンダントとして使用したのであろう。考古学会では、このような鏡を「破鏡」と呼んでいる。この鏡は、残念ながら遺構から出土したものではないが、出土した地点は、弥生時代終末期（AD3世紀前半頃）の集落跡の近くであり、周辺の同じ層位からも同時期の遺物が出土しているので、おなじころに廃棄されたと考えて間違いない。徳島県下でこのような破鏡が出土したのは、本キャンパスの体育館建設地、三好町昼間遺跡、海部町寺山1号墳での表採例に続いて4例目となるが、今回のものと体育館建設地で出土したもの、昼間遺跡の3例はいずれも弥生時代終末期に廃棄されたと。弥生時代終末期に廃棄された破鏡の類例は、西日本一帯で一般的に認められる。

3 第3遺構面の調査

④弥生時代前期中頃（BC300年頃）県内最古の水田畦畔

弥生時代終末期の集落の下、厚さ30～40cmの黄褐色の砂層を掘り下げた面で、水田畦畔（あぜ）を発見することができた。幅1～1.5m、現存の厚さ10～15cmの比較的大規模な「大畦畔」と、幅20cmほどの小規模な「小畦畔」が存在する。水の深さを調整するために大畦畔によって、一定の地域を区画し、その内側に微調整のための小畦畔をもうけて、1面の面積が比較的小さい小区画の水田をもうけたものである。これらの畦畔を覆う土や、耕作土と思われる土層からは弥生時代前期中頃（BC300年頃）の土器が出土しており、水田がこの時期の所産であることは間違いない。弥生時代前期の水田は、四国では高知県南国市田村遺跡、高松市^{きこ}浴・長池遺跡、香川県坂出市川津^{しもどい}下樋遺跡から出土し

ており、4 例目となる。県下で今のところ最古の水田は、三好町大柿遺跡の弥生時代中期初頭例であり、今回のものが最古となった。

今回の調査では、大畦畔が「コ」の字状に巡ることは確認できたが、残存状態がよくなかったため、小畦畔は部分的にしか確認できず、水田 1 面の大きさを把握することはできなかった。また、これら水田と、南に隣接する地点で見ついている用水路群との関わりも、今後の調査にゆだねなければならない。

IV 出土遺物

今回の調査では、先述の異体字銘帯鏡のほかにも相当数の土器・石器類が出土している。目下整理作業中であり、詳細の報告は今後に期したい。出土量は以下の通りである。

土器類-コンテナ 49 箱

石器類-コンテナ 2 箱

鉄器・青銅器類-コンテナ 1 箱

木器類-コンテナ 1 箱

IV まとめ

最後に、今回最大の成果である、破鏡（異体字銘帯鏡）の発見と、県内最古の水田発掘の 2 点についてまとめる。

鏡は、岡村秀典（京都大学人文科学研究所助教授）氏の研究によると、前漢末～^{おうも}王莽^{しん}の新（AD1 世紀前半）のころに作られ、輸入されたものということになる。ただし、他方では AD2・3 世紀に、前漢代の鏡をもとに複製されたものが日本列島に持ち込まれたという説もある。前者の説にしたがった場合、AD3 世紀頃廃棄されるまでには相当の期間伝世したことになる。後者の説をとったとしても、割られた鏡を磨くまでして大切に保管していたという事実は同じである。問題は、この破鏡が埋納されたのではなく、副葬されたのではなく廃棄されたということである。これが解決すべき最大の問題点である。

また、今回の発見は、県内の 2 つの発見と結びついた。1 つは板野町黒谷川郡^{くろだにがわこう}頭遺跡^ずにおいて、破鏡が廃棄されたのとおなじころに円形の竪穴住居から方形

の竪穴住居へと変化し、集落の再編成がおこなわれたという事実であり、2つはこれも近い時期に徳島市矢野遺跡において最終末の銅鐸が埋納されたということである（ともに県埋蔵文化財センター調査）。この3つの発見は一連の歴史的文脈のなかで理解すべきだろう。

すなわち、AD2世紀末～3世紀初頭は中国では後漢王朝が滅亡し、三国鼎立^{ていりつ}の時代を迎え、日本でも「倭国大乱」を経て邪馬台国の卑弥呼が共立される激動の時代である。ちょうど同じ頃、弥生時代を特徴づける文物であった銅鐸があるものは地中深く埋められ、あるものは廃棄され、その役割を終えた。まさに新しい社会秩序が形成されつつある時代であり、この前漢鏡も銅鐸と同様の命運をたどった結果廃棄されたのではないだろうか。今回の発見は、徳島における弥生時代から古墳時代への変遷をたどる上で貴重なものとなった。

次に、今回の水田発見によって、庄・蔵本遺跡の弥生時代前期におけるムラの構造がようやく明確となった。すなわち、眉山裾の微高地上に環濠をともなった集落が存在し、微高地の縁辺部に用水路群、その北側の低地に水田を営んでいたのである。弥生時代初期の集落構造を明らかにするとともに、県内の弥生時代の起源を考える上で貴重な発見となった。

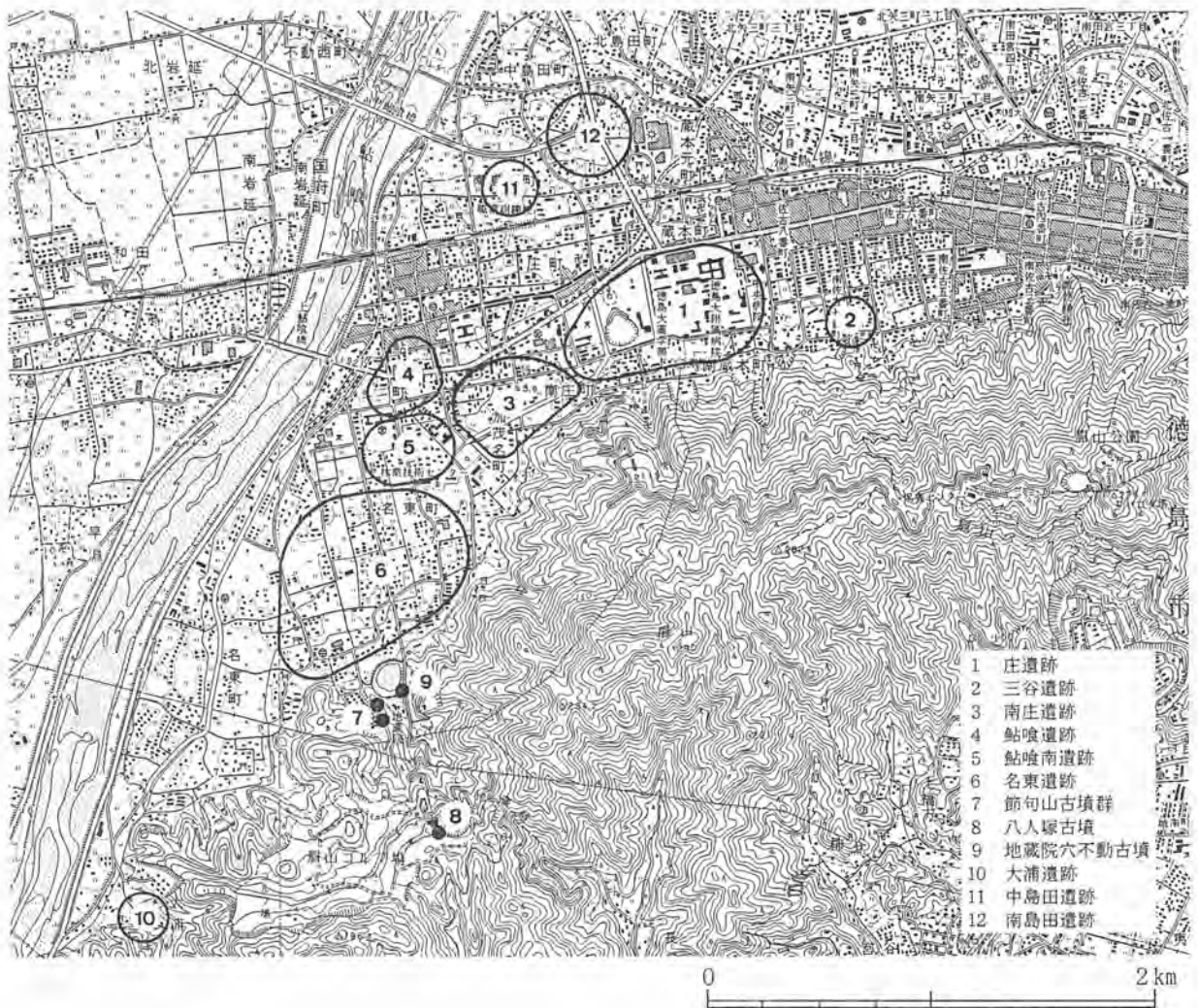
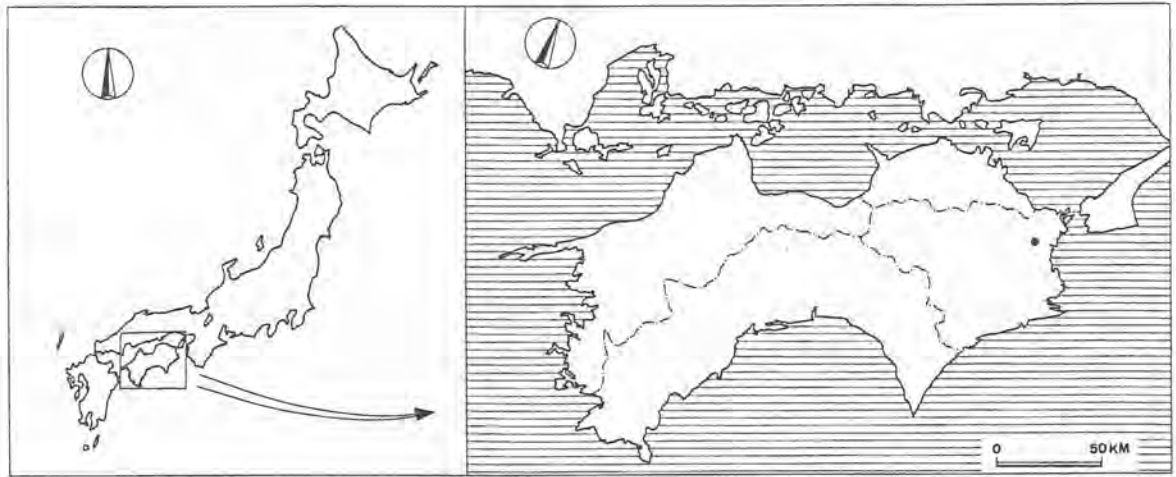
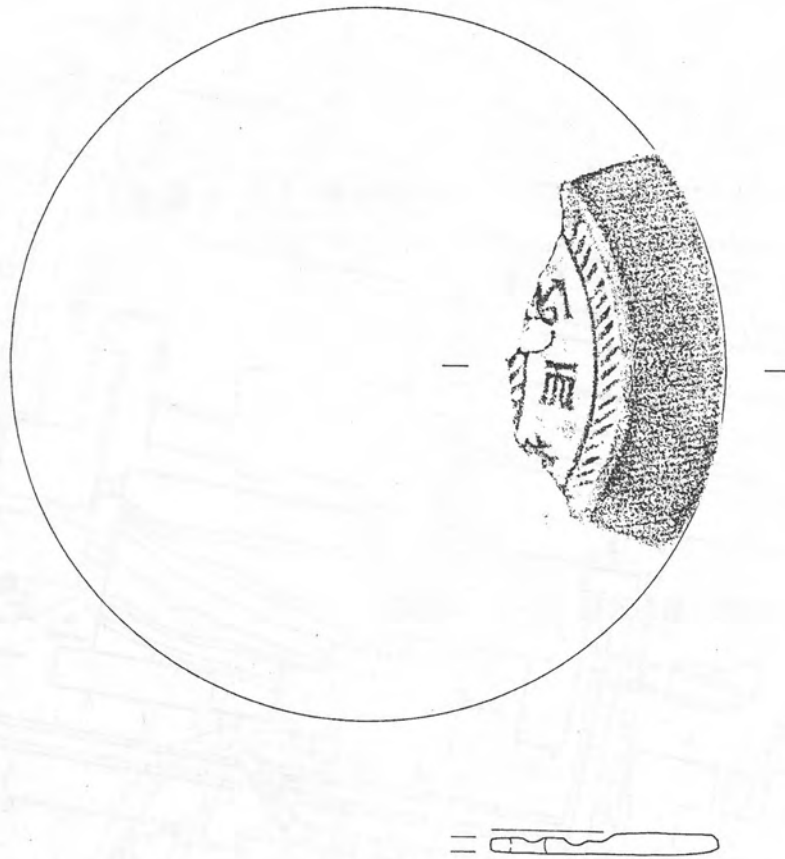


図1 庄・蔵本遺跡の位置



…以而口…

内而青而以召而明光而象夫而日月而

佐賀県二塚山遺跡出土鏡より

内は清質にして以て昭明なり 光輝は夫の日月か じつげつ にに象たり
「立岩遺跡」より

図2 破鏡（異体字銘帯鏡）1/1

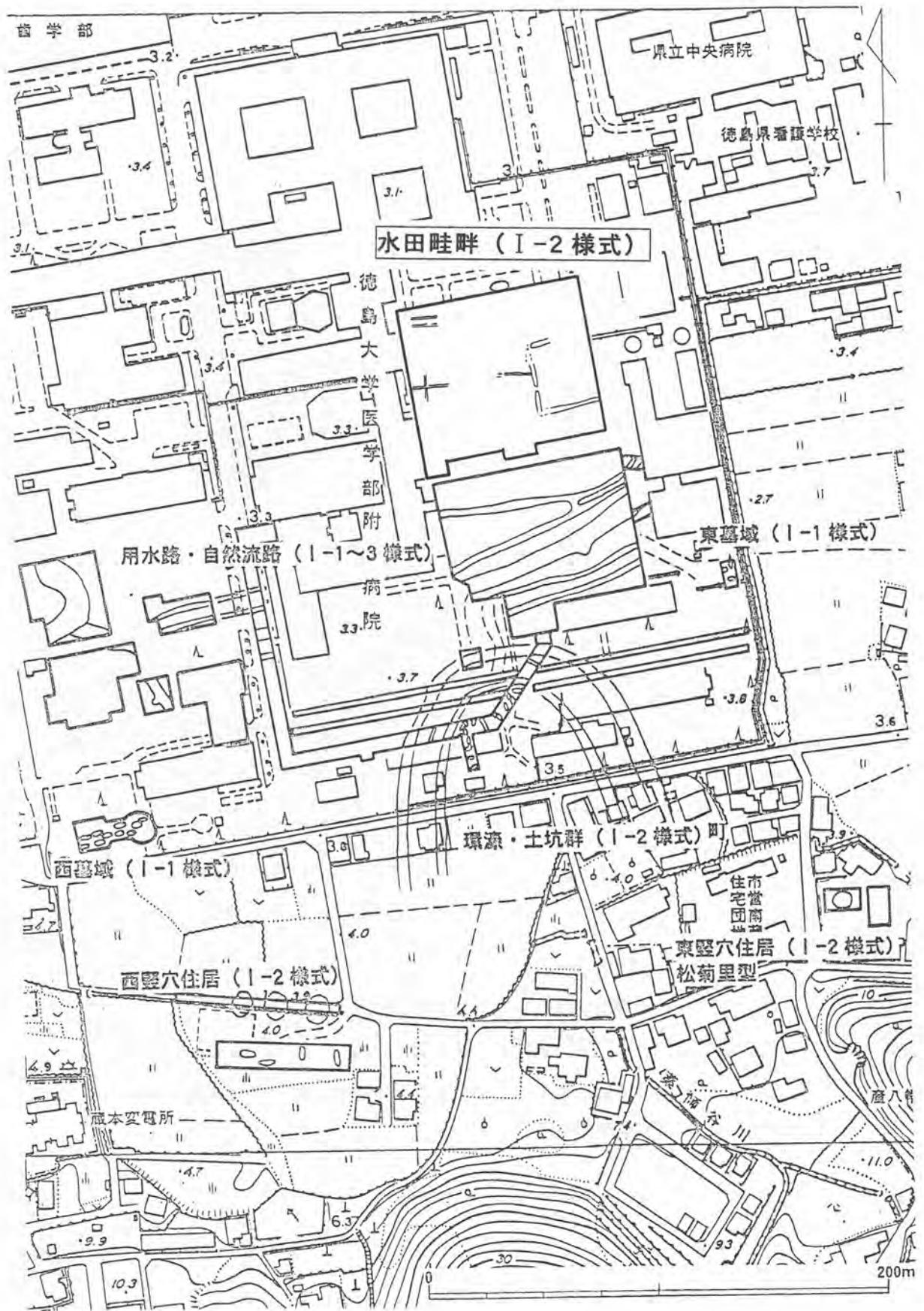


図3 庄・蔵本遺跡における弥生時代前期のムラ全体図



図4 中世の条里制地割にもなう溝

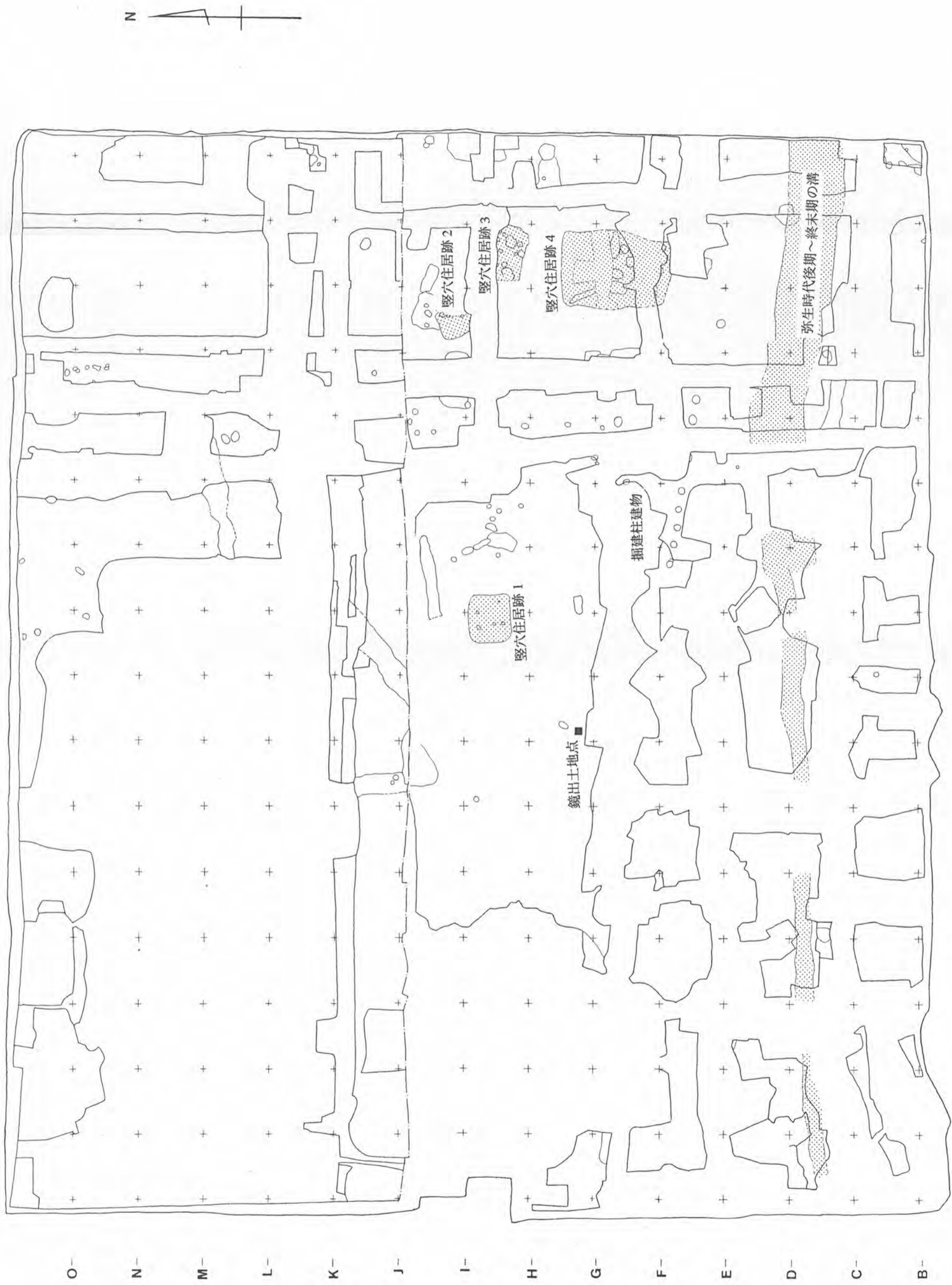


図5 弥生時代後期・終末期の遺構

15M



图6 弥生时代前期中頃(県内最古)の水田哇畔



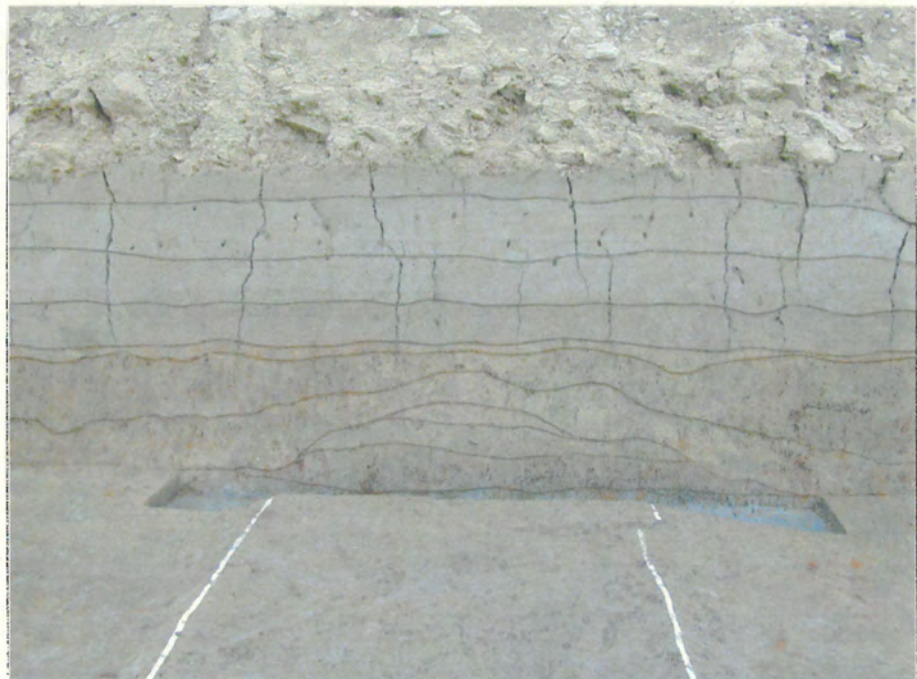
弥生時代終末期の集落跡



破鏡（異体字銘帯鏡）出土状況



弥生時代前期の大畦畔



大畦畔断面



弥生時代前期の水田域 1



弥生時代前期の水田域 2

発掘調査実績報告

庄・蔵本遺跡発掘調査概要

-新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査-

徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室

2000年4月

作成 中村 豊